

「無言館」シリーズ 2・・・無言館の誕生（その2）

□今回は『眼の人 野見山暁治が語る』から「祈りの画集」をきっかけに「無言館」が誕生するいきさつを述べたところを転載します。今回も若園さんに資料を提供していただきました。

□この本は2008年に西日本新聞朝刊に95回連載した、「聞き書き」シリーズ「あとの祭り」に加筆、全体も再構成したもので、野見山さん自身は、「エッセイストクラブ賞」を受賞したほどの能文家ですが、あえて北里晋さんの聞き書きのかたちで作られていて、「ぼく」と言う第一人称の語り口調で文がすすめられています。

.....

祈りの画集

1974年、東京美術学校出身の戦没者を特集した「祈りの画集」という番組がNHKで放映された。これが好評だということで、当時判明していた戦没者45人の遺族を実際に訪ね歩き、その様子を一冊の本にまとめようという企画が持ち上がった。お鉢が回ってきたのは、番組にゲストとして出演をしたぼく（野見山暁治）と宗左近、安田武の三人。思えばこれが、戦没画学生の遺作を訪ねる長い旅の始まりとなった。

ぼくは出征先で肺病になり、帰国できたが、戦地から戻ってこなかった同級生や先輩は多い。小さな学校なので、顔なじみも少なくない。訪れる先はその親兄弟ということになる。

例えば、大倉裕美という埼玉出身の戦没画学生の家には、在学中よく遊びに行った。お母さんも知っている。訪ねたら、その母親が「あなた、よく生きていましたね」と迎えてくれた。晩ご飯をと誘われたので、一緒に食べるのかと思ったら、ぼくだけで、母親が給仕してくれる。帰りがけ、大倉の母親は玄関でぼくの背中に回って、コートを着せてくれたが、その手が背中からじっと離れない。声をしのばせて、泣いていた。

つかの間、息子が帰ってきたんだ。出征の日は風が強くて、幟（のぼり）が立てられなかったという。それを思い出したのだろう。

おれは何て楽天的な男かと自分を責めた。戦争が終わって30年。一家が忘れられなくて、それでも忘れようとあがいているところに、のこのこと見物に来るなんて。

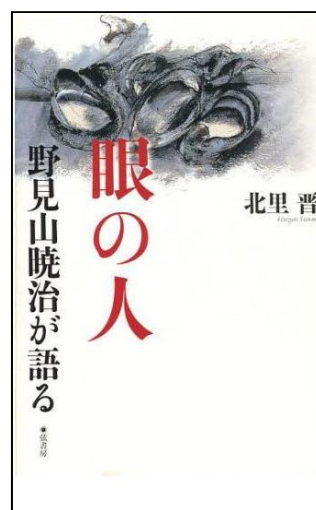
3, 4軒回っただけで、ぼくはNHKに「やめさせてくれ」と頼んだが、強く慰留された。実は他の二人は既に辞めていたんだ。ぼくまで下りたら企画が成り立たない。美校出身のぼくですらこんなにつらいのに、いまさら他人に振れないと思ひ、結局二人が残した分のほとんども一人で回ることにした。

遺族というのは不思議なもので、自分の子どもや兄弟がもし生きていたら、どれくらいの絵描きになったかを知りたがる。（中略）

ぼくは学生のころ、上級生の絵はうまいと思ひ込んでいたが、あらためて見る遺作はみんなへたくそだった。だが、多くの作品を見て回るうちに、ぼくは「この人は絵描きになりたいと駄々をこねたはずだな」と思える、有無を言わせない一点が必ずあることに気付いた。

その一点だけがずっと頭の中に浮かんで来てね。何となく底光りするような、「もっと描きたかった」という気持ちが画面の下からにじんできると感じる。

最後は、もう一回遺族を回ってみたいと思うくらい、遺作の印象がぼくの中で膨らんできた。



2009. 10
弦書房（¥2100）

無言館への旅

「祈りの画集 戦没画学生の記録」（日本放送出版協会）の取材で訪ねた遺族は、みんな忘れられない。井沢という画学生は栃木の貧しい農家出身だった。絵描きになりたいあまり、野良仕事もうつつな様子を哀れに思った兄が、「自分が弟の分も働くから」と親に頼み、当人を東京美術学校にやった。学費は先祖代々のケヤキを切って工面したという。訪れてみると、粗末な家の前に切り株が残っていた。

その弟が戦死した。年老いた兄は「国は自分の弟を連れて行ったきり返さない。絵くらい引き取ってもいいのでは」と訴えた。ぼくは「絵を預かってくれる所を必ず見つけます」と約束して家を辞した。

別の画学生の兄は兵庫県芦屋に住む裕福な人だった。「私が死んだら、息子は見たこともない叔父の絵は無用の長物だろう。遺作の中から残すべき絵を一点でも二点でもいいから選んでくれ」と頼まれた。「残りは焼いてしまいたい」という。

ぼくは、これは常の美術館の仕事とは違うと思った。いい絵として見せるのじゃなく、ただ一途に絵とはこういうものだということを示す、片隅の壁面だけでもいいから、そんな場所が欲しいとの思いが募ってきた。

信濃デッサン館（長野県上田市）館主の窪島誠一郎という人と出会ったのは、それから二十年近く後のこと。窪島さんは、「祈りの画集」を読み、ぼくをデッサン館主催の対談のゲストに招いた後、「先生が言われるような美術館を実現させたい。遺作集めに協力してもらえないか」と求めてきた。

ぼくは「やめた方がいい」と忠告した。時間と資金だけの問題でない。若い遺族からは詐欺師あつかいにされることも覚悟しないとイケない。随分脅したが、彼はひるまなかつた。この人なら本当にやってくれるなと思い、二人で動き始めた。

かつて訪ねた遺族に連絡を取ると、戻ってきた返事は三分の一ほど。中心世代は親から兄弟に代わっていた。真っ先に訪ねたのは例の栃木の画学生の兄。「先生、二十年待っておりました」と頭を下げられたとき、ぼくは来てよかったと思った。そうでなかったら、この人は死ぬまで待っていたかも知れない。

戦没画学生の慰霊美術館「無言館」は1997年、デッサン館の近くに開館した。予想外の話題となり、年間の来館者は約十万人。当初十四、五人だった寄託作品も増え続け、百人を超えたという、2008年秋には第二展示場も開設された。

.....

野見山暁治



▼現代日本を代表する画家の一人。1920年に福岡県に生まれ、東京美術学校を卒業と同時に応召したが、肺病を患ったために満州で入院生活を余儀なくされ、生きて日本に還る。

▼戦後、「生き残った画家」の虚脱感のなかから再出発をはかった彼は、1952年に渡仏、1964年に帰国するまでの間にサロン・ドートンヌ会員となり、第2回安井賞を受賞。1992年芸術選奨文部大臣賞、1996年毎日芸術賞を受賞し、2000年には文化功労者に選ばれた。元東京芸術大学教授。

▼生きもののように蠢（うごめ）く不思議な形を奔放に描いて、独自の表現を切り拓いてきた作品は、東京国立近代美術館、福岡県立美術館、神奈川県立近代美術館など多数の美術館に収蔵。地下鉄副都心線、明治神宮前駅の壁面、縦およそ3メートル、横10メートルのステンドグラスの大作は、NHKでも特集放映され有名。絵画作品のほかに、第26回日本エッセイストクラブ賞受賞の『四百字のデッサン』をはじめ、『パリ・キュリイ病院』『遠ざかる景色』など著書多数がある。

▼2005年 野見山暁治、窪島誠一郎の戦没画学生慰霊美術館『無言館』に第53回菊池寛賞。

▼2005年「九条美術の会」発起人（窪島誠一郎など9名のうちの1人）、呼びかけ人の1人。

▼義弟（妹の夫）は、直木賞作家の田中小実昌。田中の逝去まで実の兄弟のような交流があった。共著もある。

▼出征の時の父親主催の壮行会で「世界市民の一員同士として殺し合いはすべきでない」と挨拶して、地元名士たちの怒号につつまれた。魅力あふれる逸話・人柄が、他にもたくさん『眼の人』の中にあり、紹介しきれない。この人なしには「無言館」は誕生しなかったであろう。ぜひ『眼の人 野見山暁治が語る』をご一読あれ。